kigokoro

EIDAI Corporate PR Magazine　Summer 2023 / vol.16

樹ごころ

EIDAI

kigokoro

Summer 2023 / vol.16

第16号 令和5年7月1日発行
編集・発行：永大産業株式会社 事業管理部 広報課
〒559-8658 大阪市住之江区平林南2-10-60 TEL:06-6684-3058 FAX:06-6684-3051

表現する階段

UNICOLOR SELECTION
ユニカラーセレクション

木を活かし、よりよい暮らしを
EIDAI
永大産業株式会社
www.eidai.com
お客様相談センター
0120-685-110
[受付時間] 平日・土曜日9:00～18:00（休業日:日曜日、祝日、夏期休暇、年末年始）

EIDAI ショールームでお確かめください。

EIDAI SR　検索

M016Ze2307nsNS第1版

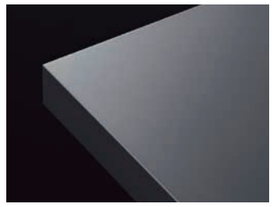
新製品紹介

GRANMAJEST
グランマジェスト

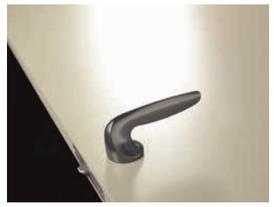
内装材の最上位シリーズで室内ドアのカラーを拡充
グランマジェスト 室内ドア GMカラーエレメント

当社の内装材でハイエンド製品と位置付けている「グランマジェスト」シリーズ。新たに室内ドアのバリエーションとして、昨今のトレンドとなっている艶消しのニュートラルカラー5色が登場しました。

詳細はこちら



「GMカラーエレメント」の5色は、いずれも一枚一枚、丹念な手吹きによる塗装仕上げ。シートでは再現が難しい、しっとりとしたなめらかな質感。



ドア表面だけでなく、木口面まで塗装。ドアの厚みをより際立たせるとともに、色調も質感も統一感のある仕上がりとしています。

ドアの厚さは40mmで、「グランマジェスト」らしい重厚感。開閉時にも確かな手応えがあり、ドアの向こうへの期待感をかき立てます。

トレンドのニュートラルカラーを手吹きで塗装した5色展開

これまでの「グランマジェスト 室内ドア」は、シート仕上げの2種類を展開。天然木の風合いを基調とした「グレインエレメント」と、石材や金属の質感や触感を基調とした「ソリッドエレメント」でした。

今回、新たに追加した「GMカラーエレメント」は、光沢を抑えたマット調のニュートラルカラーを基調としています。さらに手吹きによる塗装仕上げとすることで、シート仕上げでは再現しづらい、しっとりとしたなめらかな質感を目指しました。

ニュートラルカラーは、彩度が低い〝くすみ系〟とも呼ばれるカラーで、住空間をSNSで紹介しあう若い世代やファミリー世代を中心に支持されています。インテリアコーディネートだけでなく、ファッション、車、家電、雑貨などでもニュートラルカラーが注目されています。また、こうした中間的な色彩と相性のいいマットな質感も人気です。

「GMカラーエレメント」の室内ドアは、デザインにもこだわり、4種類の中からお選びいただけます。また、昨今増えつつある天井の高い住宅向けに、2700mmの高さまで対応可能です。

当社では、先行して発売している「グランマジェスト シューズボックス」と「グランマジェスト ファニチャー(TVボード)」に「GMカラーエレメント」を取り入れており、これらの製品との統一感あるトータルコーディネートもお楽しみいただけます。今後も高級志向のお客様に向け、さらにハイエンドゾーンにおける品揃えの拡充を図ってまいります。

開発者の声

使う人の心を満たす質感にこだわり、あえて手仕事による塗装を選択。

塗装面積が広い室内ドア。なめらかで均一な質感を追い求め、職人による「手吹き」の塗装方法を選んだ開発メンバーに話を聞きました。

「触れてわかる違いに価値がある」と語り合う3人。

室内ドアにおける「GMカラーエレメント」の開発にあたって、こだわった点や苦労した点をお聞かせください。

和佐本 「GMカラーエレメント」はすでにシューズボックスなどで展開していますが、今回のドアでは、広い面積をいかにムラなく均一に塗装するかが課題になってきます。表面剤などを選定しながら何度も試作を重ねた結果、塗装の方法としては、あえて「手吹き」を選びました。職人の手で一枚ずつ丹念に塗装するので手間はかかりますが、機械では得られない美しい仕上がりになります。

古川 工程としては、塗装面を平滑にするシーラーを塗ってから研磨することを二度繰り返し、色味を均一にするためのサイディングを施して再び研磨。そこにカラー塗装をのせ、最後に仕上げのトップコート。手塩にかけた5層重ねは、最上位シリーズのグランマジェストだからできることです。

福島 触れていただくとわかるのですが、まるで赤ちゃんの肌のようにしっとり、すべすべ。色味だけでなく、触感の違いにも価値を求める方にご満足いただけるドアになったと思います。また、毎日開け閉めするものですから、木口面も目につきやすいと考えました。その仕上げにもとことんこだわっていますのでご注目ください。

「手吹き」でクオリティを保つには、製品に対する「思い」の共有が大切ですね。

古川 おっしゃる通りです。電話ではなかなか思いが伝わらないので、通常、私のような企画担当は、設計担当と話をし、生産現場に伝えていただくことが多いのですが、今回は特に生産現場の一人ひとりにも同じ価値観を持ってもらわねばならなかったので、生産現場にまで入り込みました。

和佐本 淡い色調は特に、均一な再現の難しさがありました。でも苦労の甲斐あって、シート貼りに比べると塗装面が硬く、傷つきにくさは桁違いです。水拭きにも強いので、長く安心してお使いいただけると思います。

福島 何より圧倒的に美しく、手触りがいい。開閉時にも重厚感があります。私たちとしても非常に納得のいく仕上がりになりました。ぜひ、ショールームで触れて、開け閉めしていただき、他とは違うグランマジェスの高級感を体感いただければと思います。

室内ドアの木口面の仕上げには一般的にツキ板が使われますが、今回の塗装ではツキ板の木目を拾ってしまうため、木目のない素材を吟味してドア面と質感を合わせました。

内装システム事業部　商品部　商品開発一課
(写真 左から)
古川 伸一　課長 福島 康史　和佐本 哲明

nextpage：生産拠点のご紹介

生産拠点のご紹介

永大産業株式会社 大阪事業所 美原住設工場

高品質のキッチンを生産し続けて50年

永大産業株式会社 大阪事業所 美原住設工場は、当社で唯一の金属加工工場です。開設当時から受け継がれた高い技術でこだわりのキッチンを生産しています。

事業所棟 ゼロ災でのものづくりを推進

永大産業株式会社 大阪事業所 美原住設工場

永大産業は1969年に住宅機器シリーズの一つとして「永大キッチンセット」を発売しました。これは当社がキッチン製作事業に参入した最初の製品でした。その流れを受けて、1973年11月にキッチン生産のために大阪府南河内郡美原町(現堺市美原区)に建設されたのが美原住設工場です。美原住設工場はステンレス加工を中心とするキッチン工場で、永大産業で唯一の金属加工工場です。開設当時の当社はプリント合板などの木質製品が主力であり、ステンレスを扱うというのは大変な苦労がありました。開設から数か月間は失敗作を山のように積み上げたという逸話もあります。

美原住設工場が開設されてから、今年の11月でちょうど50年の節目を迎えます。「確かな品質とそれを可能にする技術力」は現在に至るまで脈々と受け継がれています。

美原住設工場では現在に至るまで、さまざまなキッチンを生み出してきました。当時はシンクや加熱機器、収納用のキャビネットなどが独立した「セクショナルキッチン」が主流でした。しかし、ワークトップ(天板)を1枚物として一体化した方が見栄えもよく顧客ニーズに合致するとの狙いから、1983年にステンレス1枚天板の「ピアシステムMSK」を発売しました。永大産業のステンレス製システムキッチンはここから始まりました。

その後も美原住設工場では次々と画期的な製品を生産していきます。オールステンレス製でシンプルなデザインにこだわった「ゲートスタイルキッチンS-1」、可能な限りステンレスを使用して耐久性と清潔感を追求した「ピアサスS-1」、意匠性と機能性を向上させたシステムキッチン「ラフィーナ ネオ」など、随所に永大産業の技術を注ぎ込み、プロの技が生み出した、当社のものづくりを代表する製品が生まれました。ステンレスを正確に折り曲げ、溶接し、美しく仕上げるための確かな技術に裏打ちされた製品とも言えます。特に「ラフィーナ ネオ」に使われている「スクエアシンク」は無駄な曲線を省き、シンプルさだけを追求した形状で、通常のプレス成型では作ることができません。コーナー部分は職人の高度な溶接技術で仕上げられており、しかも、清掃性を考慮した7Rの形状となっています。

美原住設工場では製品の品質を高い水準に保つ「職人芸」でステンレスの機能美を追求し、さらに差別化を図っていきます。

大阪事業所 美原住設工場の歩み

年	月	内　容
1973	12	南河内郡美原町(現 堺市美原区)に美原住設工場を開設
1974	5	ピアラインを生産
1983	9	システムキッチン「ピアシステムMSK」発売
1985	4	「コーディネートキッチンCK」発売
1987	10	堺・美原工場を統合、大阪事業所として発足
2004	1	システムキッチン「ゲートスタイルキッチンS-1」発売
2007	5	システムキッチン「ピアサスS-1」発売
2014	12	システムキッチン「ピアサスS-1ユーロモード」発売
2019	4	システムキッチン「ラフィーナ ネオ」発売
2020	6	システムキッチン「ラボッテ」発売

永大産業株式会社 大阪事業所 美原住設工場生産品のご紹介 ステンレスキッチン

永大産業株式会社 大阪事業所 美原住設工場では、開設以来培ってきたステンレス加工技術でシステムキッチンを生産しています。

ステンレス加工技術

美原住設工場ではステンレス加工技術を駆使して、高品質のシステムキッチンを製造しています。シンクのプレスから折り曲げ加工や溶接など、近代化された工場でありながらも「職人芸」が光ります。

特にシンプルな美を追求したスクエアシンクは通常のプレス成型では作ることができません。中でもコーナー部分はシャープで美しい上に、清掃性を考慮した「7R」の形状となっています。熟練の技術者がハンドメイドで仕上げる自慢の形状です。

折り曲げ工程

スクエアシンク

スクエアシンクのコーナー部分(7R)

溶接工程

ステンレスキッチン

1969年のキッチンセット発売から現在に至るまで、さまざまなキッチンが生み出されてきました。「リビングキッチンは家族の広場になる」というコンセプトで、差別化されたキッチンを生産しています。

TBS火曜ドラマ「ファイトソング」(2021年1〜3月放映)のセットに採用されたキッチン「ゲートスタイルキッチン S-1」

「ラフィーナ ネオ」

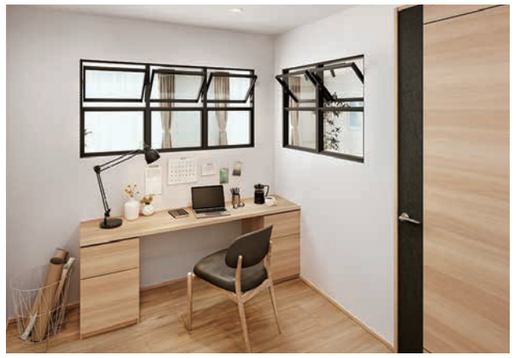
「ピアサスS-1ユーロモード」

EIDAI Headline News

■「室内窓」を発売

2月27日に発売した「室内窓」は採光や換気、開放感に配慮した専用部材です。もともとはウィズコロナの生活様式の定着に伴って誕生した製品ですが、その後はインテリアのアクセントとしての人気が高まりをみせています。

光や風を取り込みながら、家族の息づかいを感じることができるほか、特に、製品ラインナップのうちの「FIX窓(格子あり)」は、窓の表情をより豊かにし、工夫次第で住まいの中に新たな空間を演出することができます。



家族がお互いの息づかいを感じられる、心地よい距離感のあるワークスペース

回転窓

360°回転できる回転窓は換気量を自由に調整することができます。

FIX窓(格子なし)

開閉機能がないFIX窓は光を取り込み、空間を広げる役割があります。

FIX窓(格子あり)

FIX窓に格子を配すことで、室内窓に表情が生まれ、様々なスタイルで組み合わせることができます。

■ホームページがさらに充実！(「#eidai施工事例紹介」など)

詳細はこちら

当社ではホームページをさらに充実すべく、さまざまなコンテンツを追加しました。中でもお客様への認知度向上とホームページの充実を図るため、「#eidai施工事例紹介」サイトを新たに立ち上げました。このサイトは、Instagramに投稿されている製品に興味を持った人たちを、ホームページに誘導するという仕掛けが施されています。ここでは施工事例をフローリングや室内ドアなどに分類して体系化するなど、見やすい構成となっているほか、実際の住空間などが載っており、よりリアルな製品活用例としてご覧いただけます。

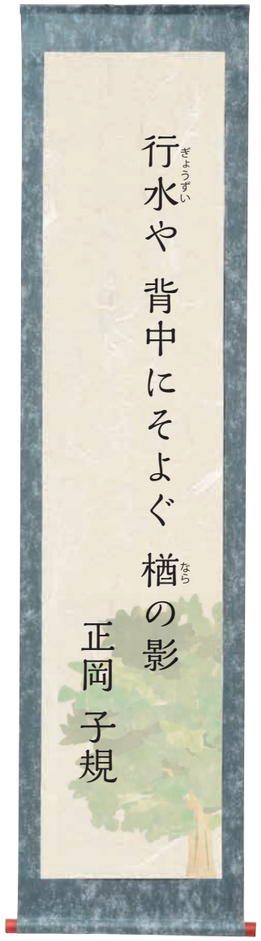
「#eidai施工事例紹介」のバナーと施工事例紹介

画像をクリックすると製品の詳細とお客様の声が表示されます

ちょっと一息。column

木と俳句

有名な俳人の句に
詠まれた木について
ご紹介します。



楢

ブナ科の広葉樹。国産のナラ材は一般的に「ミズナラ」を指し、特に北海道産のナラが良質とされる。材質は重硬で耐久性に優れ、美しい木目も特長。柾目面に現れる虎模様の「虎斑(とらふ)」が珍重される。

夏の太陽にきらめく水と、映り込む楢の葉影のコントラスト

季語は夏の「行水」。かつて庶民の家庭には風呂がなく、銭湯での入浴が主でした。そのため盥(たらい)に水を張り、屋外で手軽に汗を流すのが日常の光景でした。

今まさに、正岡子規は楢の木陰で行水する人の姿を見ています。手桶の水が、農作業で鍛えられた男性の背筋をするすると流れます。きらめく水と、映り込む葉影のコントラストが揺れながら落ちていきます。

ほんの一瞬の視覚を俳句にすることで、脳内でスロー再生されるような味わい深さが生まれました。

病苦にもがく子規の目にまぶしく映った「健やかさ」

正岡子規は明治を代表する文学者の一人です。俳句や短歌だけでなく、小説や随筆も手がけました。伊予国温泉郡(現在の愛媛県松山市)から上京後、東大予備門(現在の東京大学教養学部)で同窓だった夏目漱石とは生涯の親友となりました。

子規は子規は幼少の頃から虚弱体質でしたが、健康状態の良かった学生時代はベースボールに熱中し、「野球」と名付けたのは正岡子規だという説があるほどです。しかし、その後に体調を崩した子規は、肺結核から脊椎カリエスを発症して 34歳の若さで没しました。『行水や～』の句には、みずみずしく健やかな身体への憧憬があるのかもしれません。

家具や建材に使われるナラ材はウイスキーの樽としても活躍

楢は日本で「どんぐり」が成る木として親しまれていますが、木材としても優秀です。耐久性の高さや木目の美しさから、家具やフローリングなどの建材に利用されています。

また耐水性が高く、液体を漏らさないため、ウイスキーの樽としても活躍。日本のミズナラ樽で熟成したウイスキーは、白檀(びゃくだん)や伽羅(きゃら)といった香木のような香りがするため、希少なジャパニーズウイスキー」として世界でも人気を集めています。

nextpage：最新納入事例

最新
納入事例

キッチン
フローリング

「システムキッチン ラフィーナ ネオ」「銘樹・ロイヤルセレクション」「スキスムS 室内ドア」ほか

「キッチン空間が一番のお気に入りの場所」とおっしゃる奥様。ご主人様のこだわりで決定されたフローリング「銘樹・ロイヤルセレクション ブラックウォールナット」と、奥様がこだわったシステムキッチン ステンレス扉とのコーディネートにセンスが光ります。

2階キッチン：ラフィーナ ネオ　扉：ステンレスヘアラインクリアー
フローリング：銘樹・ロイヤルセレクション ブラックウォールナット

カップボード　上部：ピアサス S-1 ユーロモード　ハーフミラーガラス扉
下部：ラフィーナ ネオ　扉：ステンレスヘアラインクリアー

『抜群の間取りプランとこだわり抜いた製品選びで理想的な住まいを実現』

大阪北部・箕面市の落ち着いた街並みの一角に、先頃新築されたA様邸は、生活動線を考慮した間取りと、長年の「憧れ」をすべて実現された素敵なお住まいです。このたび、こちらのお住まいに当社のシステムキッチン「ラフィーナ ネオ」や挽き板フローリング「銘樹・ロイヤルセレクション」ほか、多くの製品をご採用いただきました。今回のkigokoroでは、お施主様の理想的な空間づくりの一助となった事例についてご紹介いたします。

厚さ20mmのフラットな天板、
シャープな印象のスクエアシンクは私のお気に入りです。

上段：コーナー部分の形状R7にこだわったスクエアシンク
下段：性能に定評のあるBOSCH製ビルトイン食器洗い機

大阪府箕面市
A様邸

納入製品　システムキッチン、カップボード、フローリング、室内ドア、造作材、可動間仕切り吊り戸

可動間仕切り吊り戸は
私でもカンタンに扱えました。

白一色でコーディネートした3階は、
可動間仕切り吊り戸を使用することで部屋を分割することができます。
この部屋は趣味のフラダンスの練習に使用しようかなと模索中!
白色のフローリングが、まるでハワイの砂浜みたい!

フローリング：スキスムSフロア　ハーモニックホワイト柄
可動間仕切り吊り戸：スキスムS　ハーモニックホワイト柄

トイレ・パウダールーム・ドライルーム
フローリング：リアルフィニッシュアトム 石目柄
ホワイトオニックス柄

ドライルームに続く廊下には、
正面の窓からの日差しが一直線に差し込むので、
とても明るいです。
洗濯物は全館空調のドライルームで
乾燥させることができます!
フローリングは掃除しやすく、
とても清潔です。

大きな窓は、日差しも良好!
ブラインドで気になる市街地を隠して、
箕面の山々を眺めています!

スキスムS 室内ドア
グランドハイト（2400ミリ）

お施主様のご感想

キッチン空間は特にこだわりたかったところです。他社製をたくさん見学した中で、永大産業さんの梅田ショールームでステンレスキッチンを見ました。梅田ショールームのマネージャーが熱く語る自社製品の説明が後押しにもなり「これだ！」と思いました。20年間近くの構想の末に、私たちの理想がいっぱい詰まった住まいになりました。夫婦でワインやシャンパンを楽しむ週末が増えそうです。

建設・設計：吉村一建設

nextpage：間取り

interview

匠に聞く ②

宮大工 川瀬 龍覚（かわせ りゅうかく）氏

社寺仏閣の意匠について

今に伝わる社寺建築と一般住宅の間には、どのような相違点が見られるのでしょうか。前号に引き続き、宮大工の川瀬龍覚氏にお話をうかがいました。

平安時代初期に創建された杭全神社は幾度の改修工事を経て今も現存する（大阪平野区）

現代の住宅と社寺に用いられる建具の抜本的な違いについてお尋ねします。

そもそも社寺建築の本質は何かと申しますと、一般的には神仏をお祭りする神聖な場所ととらえられがちですが、実は外敵から身を守るための「要塞」という方が的確なのです。したがってその構造には、容易に外敵の侵入を許さない工夫が凝らされています。神社では、それが「魔除け」として屋根瓦をはじめ随所に見ることができます。

「要塞」の部分が最もよく表れているのが開口部です。当時の成人男性の身長が現代よりずいぶん低かったこともありますが、飛び道具（弓矢）からの攻撃に備えて、内側から畳をすぐに開口部に立てかけられるよう、内法（建具の高さ）は5尺7寸（1730㎜）を基本としてきました。畳の長さは関東間で6尺（1820㎜）、関西間で6尺3寸（1910㎜）です。当時の畳の厚さは2寸（60㎜）でしたから、短い関東間でも開口部がその程度の高さなら十分だったのです。

現代では天井まで届く長尺の室内ドアが販売されています。これはわが国が平和になった証であり、近年建立された社寺も、開口部の高さが1860㎜～2060㎜に設定されています。間取りについても現代では、より便利で暮らしやすいことが追及されますが、その点も防衛重視の社寺建築とは大きく異なるといえます。

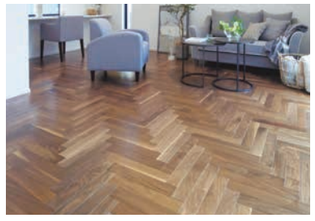
畳床に棕櫚（シュロ）を使用した畳が今も残る常光寺（大阪淀川区）

斜め格子のデザインは建具などで昔から使用されていた

デザインについてはいかがでしょうか？

明治時代に入り、洋風の建築が我が国に紹介されました。いわゆる「ヘリンボーン」という模様は、わが国で「杉綾（すぎあや）織り」と呼ばれています。社寺建築では、似たような模様で「矢羽」「網代組」というものがあり、専ら天井や建具などに用いられてきました。しかし、床材にそうした模様を用いることはありません。それは宮大工の技術では「規矩術（きくじゅつ）」が元になっていて、円と角を用いるからです。最新のデザインが重視される現代の一般住宅と、伝統的な社寺建築はこうした点でも異なっていることがわかります。

（次号に続く）



当社フローリング「銘樹ヘリンボーン」

当社の室内ドア（グランドハイト）

プロフィール

川瀬 龍覚氏（かわせ りゅうかく）

仏門に入っており、本名は川瀬 建二（かわせ けんじ）氏

1944年広島県生まれ。さまざまな職歴を経て、23歳の時、宮大工の門をたたく。これまでに200以上の社寺建築に携わり、1998年「黄綬褒章」授賞。

EIDAI HISTORY

第16回 建材（木質フローリング）

今回も前回に引き続き、建材（木質フローリング）の歴史についてご紹介します。

1946（S21）〜 1950（S25）〜 1955（S30）〜 1960（S35）〜 1965（S40）〜 1970（S45）〜 1975（S50）〜 1980（S55）〜 1985（S60）〜 1990（H2）〜 1995（H7）〜 2000（H12）〜 2005（H17）〜 2010（H22）〜 2015（H27）〜 2020（R2）〜 2021（R3）〜 2022（R4）〜 2023（R5）

ダイレクトプリントの技術をフローリングに応用

1967年における新設住宅着工戸数は好景気に支えられ、99万戸と100万戸の大台まであと一息というところまで迫っていました。新たに売り出したフローリングのリードタイムを短縮し、なんとかこの需要増の機会をものにしたいと考えていた当社は、1968年4月、敦賀事業所に当社で初めてとなるフローリング工場を完成させました。

合板を基材に表面化粧を施したわが国の木質複合フローリングは、1950年代半ばに実用化されましたが、急激な伸びを示し始めた1960年代半ばには、すでにいくつかのメーカーが、銘木フローリング、寄木調のパーケットフローリングの生産を始めていました。

当社が「タフトップW」（前回参照）を発売したのは、こうした他社に対抗する狙いがありました。しかし、自社でツキ板を自在に使いこなし、フローリング製品として発売するには、まだ時間が必要だったため、当社は敦賀事業所でダイレクトプリントによるフローリング「つるが」の生産を始めました。

このダイレクトプリント（永大式積層強化印刷法）とは、壁材（プリント合板）の技術を応用したもので、下処理を施した合板の表面に、直接木目調の色柄を印刷する手法です。壁材とは異なり、フローリングは耐久性が求められるため、その表面をポリウレタン樹脂でコーティングし、強度を高める工夫を行っていました。

また、他社製品との違いを浮き彫りにしようと、当時日本プロレスの看板選手だったジャイアント馬場氏を広告に起用するなど、拡販のためのプロモーション活動に、労力を惜しみませんでした。

1970年にはポリウレタン樹脂を二重にコーティングし、耐摩耗性を高めた「つるがスーパー2000」という製品の生産も始めました。この頃は生活の洋風化が進み、洋室にマントルピースをしつらえた建売住宅も登場する中、「つるがスーパー2000」は、こうした洋風化の動きに対応するため、大理石模様の製品を品揃えしていました。

一方、山口県の永大木材工業株式会社（現山口・平生事業所）でも1969年、合板工場の中にフローリングの生産設備を整え、縁甲板を模したフローリング「ひらお」の生産を開始しました。

この「ひらお」は「つるが」の姉妹品という位置づけで、縁甲板らしい見映えにしようと、桧や松の木目を基調とし、「つるが」と同様、表面をポリウレタン樹脂でコーティングした製品でした。

ただ、永大木材工業株式会社時代は、「ひらお」の発表後も、それほどフローリングの生産に傾注していくことはなく、実際にフローリングの量産工場としてのポテンシャルを発揮し始めたのは、1982年に永大産業株式会社に吸収合併され、山口・平生事業所に改組されて以降のことでした。したがって、山口・平生事業所の歴史を語る場合、フローリングの初号品は確かに「ひらお」ということになりますが、こうした背景から吸収合併の直前に生産を開始し、のちに大ヒットしたカラーフロア「タフトップHi」の生産開始を起点としています。

「つるが」「ひらお」当時の広告

「つるが」の姉妹品「ひらお」も誕生

半世紀以上前に誕生したフローリング「ひらお」

2

編集後記

永大産業株式会社 事業管理部 広報課 ©2023Eidai Co., Ltd.

本州～四国間に橋が架かる前の頃、四国出張の交通手段は船または飛行機のどちらかでした。夕方が近づくと最終の出航（出発）時間が気になったものです。取引先の多くは「（四国まで来て）日帰りはなかろう」と考えていたようですし、仕事が終わってからは「まぁ一献」と、お誘いを受けることもしばしばありました。もちろんスマホがない時代ですから、復路の乗船（搭乗）の変更や取消も、そう簡単ではありませんでした。

思えば本当に便利になったものです。しかし、遠方でも「はるばるここまでやってきた」との感は失せ、船がゆっくりと岸壁を離れる時の情景は、もはや郷愁でしかなくなってしまいました。そんな不便な時代を懐かしく思うのは、それだけ歳をとったということなのかもしれません。

お断り：原則、文中での敬称は省略させていただいております。